

日本手話における視線の文法化

目の開き方と眉の動きについて

小藺江聡 (東京家政大学非常勤)・

木村晴美・市田泰弘 (国立身体障害者リハビリテーションセンター学院)

はじめに

手話言語において重要な役割を果たしている非手指動作には、頭の動き、口型と頬の動き、視線の方向、目の開き方、眉の動きなどがある。このうち、視線についてはこれまで、市田 (1997a, b) や、小藺江ほか (2000, 2002) などの一連のロールシフト研究で、その分類を試みてきた。本研究では、さらに一步進めて、目の開き方と眉の動きの組み合わせとしての「目のふるまい」について、その全体像を明らかにし、合わせて、起源的な意味、意味の拡張、および、文法化について述べる。

基本タイプと無標

すべての非手指動作は、市田 (2001a) で述べた4種の基本タイプのいずれかを基底にもつ。目の開き方や眉の動きについても、基本タイプによって無標の状態が異なっていることには注意が必要である。例えば、目も眉も無標である場合、基本タイプでは、目はやや半閉じに近く、眉はやや上げ気味となるのに対し、 \sim では、目はやや細めで、眉はやや下げ気味になる。だが、これらの目や眉の状態は、有標の特徴としての「目細め」や「眉上げ」「眉下げ」とは異なる。逆に、 \sim で眉上げと共に起る場合を除いて、いわゆる「普通の開き方」と同程度に開いた目の形は、非手指動作においては「目開き」という有標の特徴となる。

目のふるまいの種類

目の開き方には無標を含めて4通り、眉の動きにも同じく4通りがあり、目の開き方と眉の動きの組み合わせからなる「目のふるまい」には、次表のように16通りある。

目\眉	上げ	無標	下げ	上下(互い違い)
開き	目を見張る	何も見えていない	目を光らす	困惑+驚き
無標	注意喚起	無標	否定的感情	困惑
細め	見えにくい	強調	目を凝らす	困惑+否定的感情
閉じ	まったく見えない	目を閉じる	目をつぶる	困惑+あきらめ

目のふるまいの分類

まず、「眉上下(互い違い)」は、その特徴そのものが「困惑」という特定の意味を持つ。しかも、他の特徴によって表される意味に二次的に「困惑」という意味を付け加えるだけである。そのような点で、「眉上下」は他の特徴とは一線を画しており、この特徴を含む4種類の目のふるまいは、以下では扱わないことにする。

残る12種類の目のふるまいを、その担う意味から分類すると、大きく3つのグループに分けることができる。「モダリティ」に関わるグループ、そして、「見る」と「見ない」という「視覚」に関わる2つのグループである。「モダリティ」には「注意喚起」「強調」「否定的感情」,「見る」には「目を見張る」「見えにくい」「目を光らす」「目を凝らす」,「見ない」には「まったく見えない」「何も見えていない」「目を閉じる」「目をつぶる」がある。以下、これらのグループ別に詳細な分析を試みる。

「モダリティ」

このグループは、話し相手との関係において機能するグループである。

「注意喚起」は、yes/no 疑問文、WH 疑問文、条件節、話題化などに現れる。ただし、この「目無標、眉上げ」という標識は、上のような各種の文を作るための必須要素ではない。断片的な指摘になるが、yes/no 疑問文においては、それが単なる判定要求でなく、勧誘文として機能するためには、「注意喚起」の標識が欠かせないし、逆に、WH 疑問文では、話し相手から得た情報を失念してしまつて質問する場合には、「注意喚起」の標識は用いることができない。さらに、この標識は、条件節では仮定の実現可能性が低いこと(つまり、「もしも万一〜」という状況)を示し、話題化では対比の意味を加える。

「強調」は、単語や文の意味を強める。この標識が共起した例には、「濃い青」「薄い青」のような対照的な意味をもつ用法があるが、これは、基本タイプによって与えられている意味(「強さ(=濃さ)」、「弱さ(=薄さ)»)が強調されているものと考えることができる。

最後に、「否定的感情」は、文字通りの意味を付加する標識である。

「視覚」 「見る」と「見ない」

このグループの標識は、起源的には「見る/見ない」という行為にまつわるさまざまな様態を表す。それらが「理解」や「判断」に拡張されて、さまざまな意味を持つようになる。この意味の拡張をとらえるために、理解に関わる意味の例として、WH 疑問文と共起した場合、そして、判断に関わる意味の例として、意見を主張する平叙文と共起した場合のそれぞれについて、その担う意味を次表にまとめて提示する。

なお、「見る」グループは、それ自体が視覚動詞として機能するが、視覚動詞以外の行為動詞と共起すると、「～しながら見る/見ながら～する」という複合動詞を形成する。一方、「見ない」グループは「何も見ないで～する」という複合動詞を形成するだけでなく、様態副詞としての解釈、および、思考動詞としての解釈(「考えな

「から～する / ～しながら考える」という複合動詞の形成)が生じる。

目	眉	視覚的意味	理解 (WH 疑問)	判断 (主張)
開き	上げ	目を見張る	まったくわからず	驚くべきことだが
細め	上げ	見えにくい	よくわからず	本意ではないが
開き	下げ	目を光らす	状況を把握しようと	受け入れ難いことだが
細め	下げ	目を凝らす	事実を追求して	私が調べたところでは
閉じ	上げ	まったく見えない	見逃したので	私が信じるところでは
開き	無標	何も見えていない	状況を把握できずに	意外なことだが
閉じ	無標	目を閉じる	見ていなかったので	確信をもって
閉じ	下げ	目をつぶる	説明を求めて	強く主張して

「見ない」グループの様態副詞としての用法

「見ない」グループのうち、「閉じ」という特徴をもつものが、動詞と共起する様態副詞として用いられる時、「見ない」という視覚的な意味は、「見なくてもできる」から、「容易、順調、問題ない」という意味に拡張され、「余計なことに目を奪われないうい」から、「雑念がない、集中している、落ち着いている」という意味に拡張される。

「見ない」グループの思考動詞としての用法

目を閉じるという動作や、何も見えていない様子というのは、「思考」という行為を暗示する。「見ない」グループは思考動詞と共起して思考の様態を表現するだけでなく、思考動詞以外の動詞と共起することによって、「考えながら～する / ～しながら考える」という複合動詞を形成する。この場合、その思考には、動詞によって示された行為に関わる思考と、その行為とは別のことに関わる思考とがある。このどちらの解釈になるかは、基本タイプによって決まる。すなわち、基本タイプ と の場合は、「行為とは別のことを考える」と の場合は、「その行為について考える」という解釈になる。

「何も見えていない」の知覚動詞としての用法

「視覚」グループは、視覚以外 (聴覚、嗅覚、触覚、味覚) の知覚動詞と共起した場合、その知覚活動の様態を表現する。基本タイプ の「何も見えていない」は、単独で知覚活動を表現することが可能で、第六感 (気配など) による知覚を表すこともできる。さらに、知覚動詞以外の行為動詞と共起することで、「知覚しながら～する / ～しながら知覚する」という意味の複合動詞を形成する。また、視覚動詞と共起すると、「見とれる」という意味になる。

アスペクト標識への文法化

「目を閉じる」や「何も見えていない」は、従属節で表された出来事が中断されて

主節の出来事が起こるという文で、従属節に現れることによってアスペクトの標識として機能する。例えば、 の「目を閉じる」が従属節に現れると、「～し始めて間もなく」という意味であり、 の「目を閉じる」だと「～している最中に」、 の「何も見えていない」であれば、「～しようとした時に」という意味になる。これらは副詞的用法や思考・知覚動詞としての用法が文法化したものと考えられる。

「発見」と「予想に反する事実」 「何も見えていない」の文法化

の「何も見えていない」は、特定の文型(日本語の「～してみたら～だった」などにあたる文)の中で、「発見」の意味を持つ接続部を作る(小藺江・木村・市田, 2002)。また、従属節に「注意喚起」があり、主節に の「何も見えていない」が共起すると、「予想に反する事実」を伝える文、いわゆる「譲歩節」を含む文(日本語の「～のに～だ」にあたる文)になる(市田, 2001b)。

「時間経過」と「場面転換」

の「目を閉じる」は、移動動詞と共起したり、単独で現れて、「時間経過」や「場面転換」の意味を持つ。目を閉じる動作が、「暗転」のような意味を担ったものと考えられる。この標識も特定の文型の中で、その構成要素として頻繁に用いられる。

まとめ

「目のふるまい」を目の開き方と眉の動きの組み合わせととらえ、その起源的な意味と、意味の拡張、文法化について述べた。従来、ロールシフトや文法の研究において、十分に区別されずに論じられてきた「目のふるまい」の全体像が、本研究の分析によって、より明確になったものとする。本研究が、日本手話の文法記述をさらに進展させることを期待している。

参考文献

- 市田泰弘(1997a)「ろう者と視覚：手話における視線の分析を通して」『感覚変容の記号論』(記号学研究17号) pp71-86. 日本記号学会
- 市田泰弘(1997b)「日本手話における視線」『日本手話学会第23回大会予稿集』 pp34-37. 日本手話学会
- 市田泰弘(2001a)「日本手話の非手指動作の基本タイプについて」『日本手話学会第27回大会予稿集』 pp16-19. 日本手話学会
- 市田泰弘(2001b)「ろう教育は手話を言語として認知できるか」『聾教育の脱構築』金澤貴之編、pp113-141. 明石書店
- 小藺江聡・木村晴美・芳仲愛子・市田泰弘(2000)「日本手話におけるロールシフト」『日本手話学会第26回大会予稿集』 pp8-11. 日本手話学会
- 小藺江聡・木村晴美・市田泰弘(2002)「ロールシフトの接続詞的用法の指導 「反応」をめぐる」『第18回全国手話通訳問題研究討論集会資料集』 pp53-54. 全国手話通訳問題研究会